



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	所得はポーランド・リトアニアからEU内部への移民の基幹的動機ではない : 161人の移民者への直接インタビュー調査の結果から
Author(s)	吉野, 悦雄
Citation	経済學研究, 62(2), 1-13
Issue Date	2013-01-17
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51727
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_62(2)_001.pdf



所得はポーランド・リトアニアから EU 内部への 移民の基幹的動機ではない

——161 人の移民者への直接インタビュー調査の結果から——

吉 野 悦 雄

1. 調査手法

著者は 2007 年夏から 2011 年春まで、両国から EU 加盟国への移民者に対して、その移民動機、移民者間の人間関係、移民後の職歴、学歴などについて、ロンドン、ダブリン、パリ、ハンブルグ、エッセン地方（北部ドイツ）、バルセロナ、バレンシア、コペンハーゲンの各都市で直接面接調査を行った。調査対象者はリトアニア人が 89 人、ポーランド人が 72 人であり、女性は 93 人、男性は 68 人であった。合計で 161 人である。労働者は、通常、早番と遅番に分かれて勤務しており、1 日に面会できる対象者は 2 人ないし 3 人が限界であった。8 都市で 161 人の調査に 4 年もかかった理由はこのことにある。

面接調査は対象者の母国語で行われ、ポーランド人に対しては、著者が質問者になり、リトアニア人に対しては、リトアニア人の研究協力が質問者となった。リトアニア語の会話は、調査中は主要内容が簡略に英語で伝えられ、調査終了後、リトアニア生まれでリトアニア国籍のポーランド人がポーランド語に翻訳してテープに録音し、著者はそれを聴いて分析をすすめた。調査に際しては一人のポーランド人（社会学博士）と二人のリトアニア人（ともに社会学博士）の協力を得た¹⁾。特に、調査対象者の発見とインタビューの同意のとりつけ、面会場所と時間の設定などは、彼らの協力なしには不可能であった。

質問票は、18 項目あり、それぞれに回答選

択肢と自由記入欄が用意された。選択肢の合計数は 119 であった。質問票は調査者が手元に持ち、結果を記入した。その理由は、すべての調査対象者が質問票の中の単語の意味を十分に理解しているとは限らないこと、および、口頭による回答が曖昧であり、調査者がさらに深く質問して、該当する選択肢を選択する必要があると予想したからである。また、いずれの選択肢にも該当しない回答については「その他」に分類し、その内容は、自由記入欄に質問者が記入した。

調査時間は、質問票にかかわる部分が 20 分から 45 分であり、その後の 10 分から 20 分程度の自由会話で、調査対象者が語りたいと思っていることを語ってもらい、録音した。この自由会話から、著者は予想外の貴重な情報を得た。

移民者に対する直接インタビュー調査は、リトアニアではいまだ誰も行っていない。ポーランドでは A.Kupiszewski 教授がノルウェー（非 WU）への半年から 3 年程度の出稼ぎ移民 30 名程度に対する聞き取りを行なっているが、その他のリトアニア人・ポーランド人移民調査は、調査票を郵送または手渡しして、記入してもらい後日、直接回収ないし郵送による回収を行なう調査である。マスコミなどでは電話による調査も行なっているが、信頼性は極めて

1) Dr.Vikinta Rosinaite, Dr.Jurga Bucaite (both in Vilnius University) and Dr.Marcin Stepniak (Polish Academy of Science).

乏しい。

英語文献では、種々の移民調査の論文が発見できるが、30人以上のEU移民者と直接インタビュー調査を行なった移民調査の論文は、著者が調べた限りでは皆無であった。その意味では、161人を対象とした本稿はオリジナリティを有していると考えている。

2. データの収集手法と統計分析の有効度

面接回答者の選択は以下の方法で行なわれた。調査当時、外国人労働者の強制登録（登録しないと就業できないという意味での強制）は英国を除いて行なわれておらず、当然、住民票のようなものも存在せず、無作為抽出など考えられなかった。ドイツなどでは不法滞在者も多数いた。調査終了後に、ドイツを含む全EU加盟国で（ただしルーマニアとブルガリアを除く）、EU加盟国の国籍を持つ労働者の他国での自由労働が認められるようになった。調査当時は不法滞在が多数存在した。そこでまず、各都市で、一名のキー・パーソンを選んだ。ステーキ・レストラン・チェーンの店長であったり、土曜日の午後に小学校で行なわれる母国語の補習授業の教師だったり、カトリック教会の神父だったり、現地での母国語での週刊誌の編集長であったりした。しかし、そのキー・パーソンには面接調査を行わず、面接調査に同意してくれそうな知人を2名ほど紹介してもらい、その2名にインタビューを実施した。そして、その2名のそれぞれに、各自が知っている知人を1ないし2名紹介してもらった。そして、第3段階ではその2名のそれぞれに、各自が知っている知人を1ないし2名紹介してもらった。このようにして第6段階程度で20名前後の面接調査を実施することができた。第3段階以降では、キー・パーソンの影響はほとんど感じられず、具体的に言えば、キー・パーソンが神父であっても、第3段階以降では特に熱心な信徒がいたわけでもないし、同性愛者もい

たし、「技術の科学」という新興宗教の信者もいた。年齢的には、意図的に80歳代の男性と90歳代の女性を1名ずつ選んだほかは、現役の労働者、求職者（失業者）、学生であって、20歳から45歳くらいまで、ほぼ均等に分布していた。専業主婦は一人もいなかった。

既に述べたように、選択肢は119あるが、分析の結果、相関係数分析から特に意味がないと判断した45の選択肢を除いて、74の選択肢を分析した。また「その他」に分類せざるをえないが、実際には前もって用意しておくべき選択肢（具体的には、夫が収入のため単身で移民し、安定した職場と住居を確保できた段階で妻や子供を呼寄せせるパターン）である。これに該当する選択肢がないことは調査の初期の時点で気づいたが、調査票を改変するのは一貫性がないので、調査票では妻が「収入のため」移民したと回答していても、会話内容のテープを聴いて、分析に際しては、「男女の愛」という項目に変更した。この点が唯一の調査票の変更点である。同性愛者も「男女の愛」に分類した。

その結果、2つの選択肢の間の相関係数は、 $74 \times (74 - 1) / 2 = 2701$ 個となる。ポーランド人移民社会では、2701個の相関係数のうち、117個がプラスまたはマイナスの係数を伴って、1%有意水準で対立仮説が棄却された（以下、簡略化のため単に1%有意水準で仮説が推認された、と述べることにする）。また5%有意水準でみると、これ以外に120の相関係数が推認された。リトアニア人移民社会では、2701個の相関係数のうち、115の係数が1%有意水準で推認され、それ以外に141の係数が5%有意水準で推認された。つまり全体の9%ほどの相関係数が1%および5%有意水準で推認されたわけで、これは、社会調査の結果として極めて高い数値であるといえる。この結果の解釈は次節以降で述べよう。

表1 ポーランド人とリトアニア人とを区別しない年齢階層の特性

	35 歳未満	35 歳以上
1) 回答者数	81 人	80 人
2) 平均年齢	31.1 歳	43.8 歳
3) 当該国における平均居住年数	11.8 年	4.2 年
4) 現在の生活に非常に満足している	yes 44 人 no 37 人	18 人 62 人
5) 現在の生活にある程度満足している	yes 18 人 no 63 人	27 人 53 人
6) 現在の生活に不満である	yes 9 人	6 人
7) 現在の生活にやや不満か、または回答困難	全年齢層で 39 人	
8) 当該国に自分の家族がいるか親戚がいる	yes 27 人 no 54 人	43 人 37 人
9) 私の専門性はこの国で有益である	yes 41 人 no 40 人	22 人 58 人
10) 移民当時、当該国の言語を自由に話せた	yes 30 人 no 51 人	15 人 65 人

3. 一般的特徴

移民社会の団結性という観点からは、上記の相関係数からも分るとおり、ポーランド人社会もリトアニア人社会も大きな違いがなく強固であることが分った。その団結性をもたらしたのは何であろうか。結論から述べると、第一に、家族・親戚・恋人のつながりが最も強い要素であり、その分析は第5節で提示される。次に重要な要素は、母国における同一高校の卒業生および同一の就業先の同僚が、第一要素に次ぐコネ・ツテ・相互援助の要素であった。

学歴については、母国で博士号を取得して移民した者の職業的優位性は非常に明白であった。それに対して、義務教育である小学校卒の移民者は、161 人中ただの二人だけであった。身に付けた職業的能力と語学能力が極めて重要であることが分る。なぜなら、161 人のうち、調査時点でも求職活動を行なっている者が十名近くいたが、いずれも中等教育以上の学歴を持つものであり、義務教育卒業のみの移民者は安定的就業先をみつけることが困難であり、その多くが既に母国へ帰国したと考えられる。

予想と全く反する結果が得られたのは、高等

教育修了者の中では、現地の言葉の言語能力は、ほとんどの項目で意味のある役割を果たしていないということである。これらの一般的特徴の数値的根拠は第4節以降で紹介する。

年齢別の特徴は上の表1が示すとおりである。

表1は、非常に特徴的な性格を明示している。35歳で二分したのは、二つのグループの人数をほぼ等しくするためである。まず第一に、4) から分るように、若年層の方が、高年齢層より、生活の満足度が高いということで、若年層の方が経済的に優位な状況にあるということが分る。しかしこれは当然予想されたことである。まったく予想外だったのは、3) の平均居住年数であって、若年層がほぼ12年、高年齢層がほぼ4年という結果である。つまり若年層の移民定着率が高く、高年齢層の移民定着率が低い、すなわち短期間で母国に帰国する傾向にあるということが明らかになった。このことは9) の結果とも整合的である。すなわち、若年層の方が、自分の専門性を移民先の地域で行かしている率が高く、高年齢層では自分の専門性を行かしている者は3割にすぎない。インタビューの結果でも、道路清掃やレストラ

ンの掃除婦、セメント工などの単純肉体労働に高年齢層は従事することが多いという結果が明らかになっている。8)の結果は、3分の2の若年層が家族・姻戚関係に頼らずに移民しているのに対して、高年齢層は半分以上が家族・姻戚を頼って移民していることを示している。10)の言語能力についても若年層は高年齢層よりはるかに優位な状況にある。英国・ドイツ・フランスなどでは、若年層のかなりの割合が、現地語を自由に話していた。ただし、バルセロナ・バレンシア・コペンハーゲンでは若年層でも現地語を自由に話せる者はごく少数か、皆無であった。高年齢層においては、8都市のなかでわずか2割の者しか現地語を自由に話すことができず、しかもその多くは、ドイツ系ポーランド人で、第二次世界大戦後、ポーランド人として扱われポーランドに残ることができ、自由化が実現した後に祖先の地ドイツに戻った人たちであった。彼らの中にはポーランドでも家庭内ではドイツ語で会話していた人も多いと考えられる。ロンドンでは、反共産党の立場から第二次世界大戦後、英国に亡命した高齢者などは英語を自由に話していた。

4. 移民目的一調査票と会話テープ分析の結果

4-1)

本項では、調査票に記載された結果だけを紹介しよう。第5節で、就職斡旋や住宅斡旋の状況を示し、また移民に対しての両親の対応の調査結果も示す。その前に第4-2)節で移民動機についてより深い分析を行なうことにする。

まず、調査票の結果を示す。すでに「男女の愛」について会話の録音テープの内容から異なる結果が得られたことを述べているが、本節では、その問題は切り離して、得られた調査票の結果をそのまま示すことにする。

選択肢の複数を回答することを許容したので、リトアニアでは合計は100%を超えている。

この表には、いくつかの解説が必要である。まず、夫婦が同時に移民したケースはなかった。常に夫が先に移民している。早い場合には1週間後に、遅い場合には2年後に妻が移民している。「夫と一緒に暮らすため」という選択肢を用意していなかったため、「その他」を選択せざるをえなかった。これはリトアニア人において非常に目立った。したがって「男女の愛」とは、イギリス人男性やフランス人男性がポーランドやリトアニアを訪問し、訪問期間中にポーランド人・リトアニア人女性と恋愛関係

表2 調査票による移民動機の分析（各選択肢にyesと回答した人の比率を示す）

	ポーランド人	リトアニア人
より高い賃銀ないし収入	22.7%	29.2%
より高い職業キャリアを積むため	2.7%	13.5%
世界を見るため	10.7%	31.5%
本国では実現不可能な自己実現を行なうため	10.7%	23.6%
男女の愛（だし夫婦間の愛は除く）	4.0%	16.9%
進学のため	6.7%	23.6%
その他	30.7%	65.2%

注)「本国で失業したため」と「本国で望ましい職が得られないから」と「かつてこの国で働いたことがあるから」の3つの選択肢の回答率は低く、しかも各相関係数が0.1以下のため、分析上意味のある変数ではないと考え、この表からは除外してある。それ故、複数回答を認めているにもかかわらず、ポーランドでは合計が100%に達していない。またポーランドにおいては、テープ録音を聞き直しても、移民目的が判然としない例が4人(5.5%)いた。リトアニア人ではそのような例はなかった。

を結び、同時に、あるいは数日遅れでポーランド人女性が移民した場合が該当する。例外的に同性愛者のケースも2例あり、「男女の愛」に含めた。移民後、現地で恋人を得て、同居・結婚に至ったケースは移民動機としての「男女の愛」に含まれない。独身で移民し、労働しながら現地の男性と結婚した女性はかなり多かった。移民した息子をしたって母親が12年にわたりドイツで不法移民を継続したケースも「男女の愛」には含まれない。

さらに、ポーランド人への面接者は本稿の著者であり、第二義的目的を回答者が答えても、その理由が脆弱なため「その他」に分類しなかったことが半分ほどであったのに対して、リトアニア人への面接者はリトアニア人社会学者であり、第二義的目的も積極的に「その他」に含めたという事情もある。

このような点を留意した上で、表2を検討してみよう。第一に、「より高い賃銀・収入」においては、両国の間で顕著な差異があるとはいえないが、その他の選択肢では、リトアニア人がポーランド人の2倍から4倍の数値を示しており、リトアニア人が、ポーランド人と比較して非常に野心的であることが分る。もちろんこの背後には、ポーランドではリトアニアと比較して、より高い職業キャリアを積むチャンスが国内にあること、職業選択の幅が広く、先進的職種に就く可能性も高いこと、大学がより整備され普及していることがあることに留意しなければならない。

移民目的で注目されるのは、リトアニアでは「高賃銀・収入」目的の比率が、「世界を見るため」の比率を下回っていることである。ポーランドでは、「高賃銀・収入」目的が第一位であるが、「その他」の中の過半数は妻や子供の連鎖移民であることから、「高賃銀・収入」が重要な移民目的であることは確かであるが、第一目的とは到底述べることはできない。

録音テープから判断すると、161人の移民ケースのうち、47人の移民目的が「家族愛・

夫婦愛・親子愛・兄弟愛」に分類されるべきものであった。それゆえ、筆者は「所得」が移民の主要要因ではなく、「家族愛」が主要要因であると考えに至った。

4-2)

移民の動機の分析に際して、本項での検討では、両国を区別せずに検討を行なう。第二次世界大戦後、おそらく3千本以上の論文が移民問題を扱っているが、そのほとんどが、ドイツ第三帝国のユダヤ人政策やアフリカの人種対立などを除くと、移民動機として所得と食料を主要要因として挙げている。それに対して本稿の主張は全く異なっている。筆者は、移民の主要要因は夫婦・親子・兄弟・親戚など家族間の愛情が第一であり、所得は第二要因以下であると考えている。第3節で述べたように、夫婦の場合、夫が先に所得目的で移民し、妻が家族愛の故に移民し、しかし就業もすることを明らかにした。従来の研究はこの側面のみに注目しているのではないかと考える。さらに今までの移民分析では一家全員の同時移民に分析の主眼が置かれているように思われる。

しかし、独身の若者で、所得目的で移民するものは非常に少ないことは、既に述べたとおりである。若者の夢と野望も重要な移民動機となることが本稿から明らかになった。夢と野望は、多くの場合、高等教育機関への進学を伴う。たとえ学費が無料で奨学金が支給されていても、週に3回程度のアルバイトは自然の行動だろう。これを所得目的の移民とはとても言い難い。

調査票と会話の録音テープ聴取からは次のような結論が導出される。

a-1) 移民の動機として161人の調査対象者のうち、43名(26.2%)が所得を移民の第一動機としている。すなわち17人のポーランド人と26人のリトアニア人の合計43名が、移民の第一動機は所得であると回答して

いる。

- a-2) 第一動機として所得を挙げた者の3分の2は35歳以上の高齢層であり、3分の1は34歳以下の若年層であった。
- b) 36人が「世界を見るため」を移民動機として挙げている。
- c) 29人が「本国では実現不可能な人生の目的を実現するため」移民したと回答している。本稿では「自己実現」と表現する場合もある。
- d) 47人が「高等教育機関を卒業したり、新知識を得たり、職業的キャリアを上げるため」移民したと回答している。この回答者の85%は35歳未満の若年層であり、35歳以上の高齢層の回答は15%にすぎなかった。
- e) 47人が家族愛、すなわち夫婦・親子・兄弟・親戚などへの愛情を移民動機として挙げている。
- f) 18人が「未婚の男女の愛」を移民動機として挙げている。これはポーランドないしリトアニアで知り合って愛し合うようになった二人が主に夫の国に移民するケースである。ただし、移民の直前に母国の教会で結婚式を挙げ、披露宴を開く場合もあるが、それは少数であった。

上記の回答数の合計は220であり、「その他」の回答数は48であったから、合計で268となる。調査対象者は161人であるから、107人の者が重複回答を行なったことが分る。とりわけリトアニア人において重複回答が多かった。

上記e)とf)の合計は65人であり、「家族愛」が移民の第一要因であると結論することができる。またd)学習・熟練目的の移民が47人であり、移民の第二要因となっている。「所得」はa-1)にあるように43人にすぎず、移民の第三要因となっている。

5 移民に対する家族の反応・移民後の職歴・移民社会の連携・求職活動・住宅探し

本節における「家族」の範疇には、夫婦・親子だけでなく、兄弟姉妹や伯父・伯母も含まれていることを最初に述べておく。

次頁の表3は、両国が国境を相接し、過去半世紀近く社会主義であったという共通点があるにもかかわらず、いくつかの大きな相違点を提示している。まず質問c)において、子供に対する母親の影響力が、リトアニアにおいてポーランドよりはるかに大きいことが分る。次に、質問e), f), g)の結果は、両国を区別しない調査結果を示す表1と矛盾するかにみえる。リトアニアからの移民出国のブームは、1994年から2000年までと2003年から2009年までの2回あった²⁾。前者は毎年ほぼ2万人前後で、後者は毎年1万5千人前後である。合法(登録)移民が違法移民を上回るようになったのは、ようやく2008年になってからのことである³⁾。自然と10年未満の比率が高くなる。ポーランドの場合、1968年と1981年の政治的理由による出国を除くと、1960年が2万8千人、2000年が2万7千人、2009年が1万9千人と大きな変化なしに移民出国がつづいてきた。その結果、質問g)のように長期滞在者の比率が非常に高くなった。

質問h)はほとんどの人が安定的職場でも転職を経験していることを示している。質問j)では、最初の定住アパートを探す際に、リトアニア人では友人・知人・隣人の助けが、ポーランド人とは比較にならないほど大きな役割を果たしていることが分る。これが、リトアニア人社会の方が、相互連携・扶助が強いと云う結論の根拠の一つである。

質問k)でも、「最初の職探しを手伝ってくれた人は家族であった」という回答はリトアニ

2) 『リトアニア統計年鑑2003年版, 85頁』, 『同2010年版, 57頁』による。

表3 移民社会の生活様態と人間関係 (yes と回答した比率)

	ポーランド人	リトアニア人
a) この国以外の外国に家族や親戚が住んでいますか	25.3%	14.6%
b) この国の中に家族や親戚が住んでいますか	54.7%	74.2%
c) あなたの移民に関して、父親を除いて母親とのみ相談しましたか	6.7%	14.6%
d) あなたの移民に関して、両親と相談しましたか	36.0%	20.2%
e) この国に居住している期間が4年未満ですか	28.2%	38.4%
f) この国に居住している期間が4年以上10年未満ですか	21.2%	45.3%
g) この国に居住している期間が10年以上ですか	32.4%	8.1%
h) この国でいくつの会社・商店に勤務しましたか		
1 社	4.0%	4.5%
2 社	52.0%	46.1%
3 社かそれ以上	41.7%	49.4%
i) 移民する前に、最初の晩に泊る場所が決まっていたか ³⁾		
はい	66.7%	100.0%
いいえ	28.8%	0%
j) 誰(何)があなたの最初の定住場所を探すのを助けてくれましたか(複数回答も可)		
家族	21.3%	22.5%
恋人・愛人	21.3%	25.8%
友人・知人・隣人	17.3%	46.1%
PR またはインターネット	6.7%	10.1%
雇い主	10.7%	10.1%
職安など公共機関	10.7%	2.2%
k) 誰(何)があなたの最初の職場を見つけるのを助けてくれましたか	28.0%	52.8%
恋人・愛人	30.7%	22.5%
友人・知人・隣人	18.7%	16.9%
PR またはインターネット	6.7%	10.1%
雇い主	13.3%	12.4%
職安など公共機関	12.0%	4.5%
誰も助けてくれなかった	9.3%	10.1%
l) 移民後最初の1カ月、誰があなたの面倒をよくみてくれましたか		
家族	28.0%	65.2%
恋人・愛人	5.3%	15.7%
友人・知人・隣人	9.3%	9.0%
雇い主	1.3%	2.2%
誰もいなかった	21.3%	2.2%
m) 最初の安定的な職場が見つかるまで、どのくらい期間がかかりましたか		
1 週間以内	8.0%	23.6%
2 週間以内	13.3%	13.5%
1 か月以内	9.3%	11.2%
2 か月以内	5.3%	14.6%
半年以内	18.7%	12.4%
1 年以上	30.7%	21.3%

注)「安定的な職場」が見つからなくても、「日雇い」または「週雇い」を求めて人足広場に毎日通い、その日その日の暮らしたてる人たちが非常に多くいた。

3) この数値は、言語学の語彙の問題から発生したものと考えられる。「場所」という単語が、「橋の下」というように捉えられれば、「移民前から、どの橋の下が一番都合が良いかを知ってい

たか」という質問と理解するだろう。実際、移民して上陸してから、その晩に寝袋にくるまって寝る橋を探す者はいないであろう。前もってある程度の知識を得ていたと考えるべきだろう。

ア人の方が圧倒的に多い。質問k)でも同様のことが見て取れる。既に述べたことであるが、よりマイノリティである集団ほど結束は強くなる。そして質問l)で最初の1カ月間、誰も生活を助けてくれなかったと云う人の比率がポーランド人で21.3%にのぼり、リトアニア人ではわずか2.2%であったことから、同様の結論を導出できる。本節で、リトアニア人の方が野心的であると述べたが、質問m)の結果と矛盾するわけではない。野心的であれば、まず就職先の確保を重視するであろうし、数週間か数日で転職してしまう人間が野心的であるともいえないだろう。

6. 移民と移民社会に関する相関分析

6-1)

74の変数もたらす2701の相関係数のうち、社会調査としては非常に多くの有意性のある相関係数が発見された。ポーランド人社会とリトアニア人社会を分離して分析を行なった。そして以下のような結果をえた。

- a) ポーランド人社会における分析でも、リトアニア人社会での分析でも、共通する73個の相関関係が1%のリスクレベル（有意水準）で推認された。易しく表現すれば、「2つの変数の間に相関関係がない」という対立仮説は1%の危険度を伴うが、棄却（否定）されるという意味である。
- b) ポーランド人社会における分析でも、リトアニア人社会での分析でも、共通する29個の相関関係が5%のリスクレベル（有意水準）で推認された。
- c) ポーランド人社会では1%の有意水準で108個の相関関係が推認されたが、リトアニア人社会では1%有意水準をクリアする相関係数は一つもなかった。
- d) リトアニア人社会では1%の有意水準で97個の相関関係が推認されたが、ポーランド人社会では1%有意水準をクリアする相関係

数は一つもなかった。

- e) 14個の相関関係が、リトアニア人社会では1%の有意水準で、ポーランド人社会では5%の有意水準で推認された。
- f) 17個の相関関係が、リトアニア人社会では5%の有意水準で、ポーランド人社会では1%の有意水準で推認された。
- g) 167個の相関関係がリトアニア人社会では5%有意水準で推認されたが、ポーランド人社会では1%有意水準ではひとつの相関関係もなかった。
- h) 150個の相関関係がポーランド人社会では5%有意水準で推認されたが、リトアニア人社会では1%有意水準ではひとつの相関関係もなかった。

意味のある相関係数を上で紹介したが、注意すべき点はa)とb)を合計すると、102個の相関係数が両国ともに少なくとも5%の有意水準で推認できたということであり、2701個という全体の相関係数の個数と比較したとき、極めて多数の相関係数関係が両国間で共通していることが分る。

ポーランド人社会の特性は、a), c), h)の諸点に現れているし、リトアニア人社会の特性はb), d), g)の諸点に現れている。その具体的内容を紹介しなければならないが、膨大な量の情報量を簡潔にまとめるため以下のような表現形式をとることにする。

ポーランドとリトアニアの両国で、1%または5%の有意水準で、他の3つないしそれ以上の数の変数との相関係数を推認できたものは以下の5つの変数であった。その際に「家族」概念について既に述べたことに留意されたい。

A) 年齢。

「年齢」は「この国に何年住んでいるか」、「移民前に配偶者、兄弟姉妹、親戚と相談した」、「最初の1カ月の間、誰かが援助してくれた」の各項目と少なくとも5%有意水

準が推認された。このことは高年齢層ほど家族のつながりが濃いということを意味する。

B) 住宅探しに家族が助けてくれた。

「家探しでの家族の援助」は、「移民前に家族が寝る場所を探してくれていた」、「定職が見つかったのは1年後以降であった」、「最初の1カ月は家族が援助してくれた」、「この国に親戚が住んでいる」の各項目と少なくとも5%有意水準が推認された。筆者にとって意外だったのは、1年以上、日雇いや1週間契約のようなその場しのぎの暮らしをしていることである。既に移民している家族・親戚に寄りかかって生活している人たちである。留学生希望者がそうである場合が多いであろうし、夫の後に移民してきた妻がそうであることも多いであろう。

C) 住宅探しに雇い主が助けてくれた。

「家探しでの雇い主の援助」は商店や小企業に勤務している人に当てはまることが多いと考えられるが、これは「この国に何年住んでいるか」、「どれだけ多くの企業に今まで勤務したか」、「自分の専門性を行かせた職場がいくつあったか」、「最初の1カ月は、友人が援助してくれた」の各項目と少なくとも5%有意水準が推認された。これは新来の移民者への雇い主の恩情ではない。有能な移民労働者を別の会社の経営者が引き抜いた場合に雇い主が採る行動パターンと考える。

D) 住宅探しに恋人・愛人が援助してくれた。

これも筆者にとって予想外の結果となった。「住宅探しでの恋人・愛人の援助」は「移民前に雇用主の名前を知っていた」、「移民前に勤務先企業の名称を知っていた」、「移民前に賃銀水準を知っていた」の各項目と少なくとも5%有意水準が推認された。これは、ポーランドやリトアニアで恋人を見つけたロンドンやパリなどの男性が、恋人との同居先を見つけ、恋人の勤務先を準備してから、恋人を呼寄せた場合と考えられる。

E) 求職活動に恋人・愛人が援助してくれた。

これはD) とほぼ同じ結果となった。「求職活動での恋人・愛人の援助」は「住宅探しで恋人・愛人が援助してくれた」、「移民前に会社の名前を知っていた」、「移民前に賃銀水準を知っていた」の各項目と少なくとも5%有意水準が推認された。この理由もD) の場合と同様と考えられるので省略する。

上記5つの変数の他に、1個あるいは2個との相関係数が1%あるいは5%の有意水準で推認できた変数が97項目もあることに注意しなければならない。移民社会が緊密な連携を保っていることが確認された。

6-2)

ポーランドとリトアニアが相関関係で正反対の傾向を持つ変数の組み合わせ

これにあてはまる組み合わせは、片方の国が1%または5%の有意水準でプラス（マイナス）の相関を示すのに対して、もう一方の国が有意水準に関係なくマイナス（プラス）の相関係数を持つ場合を「正反対の傾向」と定義した。第5節よりもかなりゆるい（幅広い）基準で定義したのであるが、該当する組み合わせは27しかなかった。

A) ポーランドが1%の有意水準でプラスの相関係数を持つのに、リトアニアではマイナスの相関係数を持つケース

1) 「生活水準が同じならば母国に帰りたい」と「移民目的が所得である」

ポーランド人は所得が移民目的であったならば、同じ生活水準なら母国に戻りたいと強く望んでいるのに（1%有意）、リトアニア人は移民目的が所得であったならば、生活水準が変わらないならば帰国しないと考えている人の方が多い（これも1%有意）、ということの意味する。

2) 「移民に際して両親と相談した」と「移民目的が進学である」

ポーランド人の場合、進学目的で移民する場合、ほとんど両親と相談しているが(1%有意)、リトアニア人は両親と相談せずに留学を決めることが多い。

3) 「移民7日以内に職を見つけた」と「安定した職場探しを援助したのは恋人・家族でも友人でもなく第三者であった」

ポーランド人の場合、すばやく職を見つけた人は、安定した職探しは恋人・家族・知人の枠を超えて求職活動を行なうことが多いのに対して(1%有意)、リトアニア人の場合、すばやく職を見つけた人でも、安定した職探しを家族等の枠を超えて求職活動を行なうことが少ない。

4) 「最初の1週間恋人が助けてくれた」と「知人が私の職探しを手伝ってくれた」

ポーランド人の場合、最初に恋人が援助してくれても、安定した職探しは恋人・家族・友人の枠を超えて求職活動を行なうことが多いのに対して(1%有意)、リトアニア人の場合、最初に恋人が援助してくれれば、安定した職探しも恋人・家族の枠を超えて求職活動を行なうことが少ない。

5) 「最初の安定的職場をみつけるのに2カ月以上6か月未満かった」と「移民前に配偶者・兄弟姉妹・親戚と相談した」

ポーランド人の場合、移民前に配偶者や兄弟姉妹と相談していれば、じっくり職探しができるということだが(1%有意水準)、リトアニア人の場合配偶者・兄弟などと事前に相談していれば2カ月以内に安定的職場を見つけていることが分る。

6) 「最初の1カ月は雇用主が援助してくれた」と「職業安定所やリクルートセンターで職を見つけた」

ポーランドでは最初の職場を職業安定所などで見つけた場合、最初の1カ月は雇い主が面倒をみってくれるが(1%有意)、リクルートでは逆に面倒をみられない、と云う結果になった。これには様々な解釈が可能であり、

筆者の解釈は控えたい。

7) 「年齢」と「最初の1カ月は家族・知人以外の者が援助してくれた」

ポーランド人では高齢者ほど身近ではない人(家族・恋人・雇用者など)、例えば教会奉仕者などが就職を援助してくれている。一方リトアニア人では高齢になるほど、第三者が就職を援助してくれなくなるという結果になった。これは、リトアニア人の人的ネットワークが家族など狭い範囲で、しかし緊密に連携を保っているのに対して、ポーランド人の場合、人的ネットワークがリトアニアほど緊密ではないが幅広く広がっているということが考えられる。またポーランド人神父がいる教会は各都市で数箇所あるが、リトアニア人神父のいる教会は筆者は見つけられなかった。

8) 「現在の生活に満足している」と「当該国も含めて外国にも親戚がいる」

ポーランド人では1%有意水準で推認できる。親戚の中から移民者を排出している家族ほど、移民後の生活に満足しているが、リトアニア人では反対に、親戚の中から移民者を排出している家族ほど、移民後の生活に不満であるという結果になった。リトアニアでは貧困層から多く移民を出しており、リトアニア本国で貧困だった者は、移民先の国でも貧困である、という解釈は可能かもしれない。

9) 「最初の1カ月誰も助けてくれなかった」と「職業安定所やリクルートセンターで職を見つけた」

ポーランド人では1%の有意水準でプラスの相関が推認できる。家族・親戚・知人が援助してくれない以上、職業安定所に頼るしかないだろう。リクルート人ではマイナスの相関が示された。リトアニア語が非常にマイナーな言語であることが障害となっていることは容易に想像できる。リトアニア人で「誰も助けてくれなかった」と有意な相関を示すのは「大学院卒」(5%有意)だけであった。

B) リトアニアが1%の有意水準でプラスの相関関係を持つのに、ポーランドではマイナスの相関係数を持つケース

18 個の組み合わせが発見された。それぞれの解釈の方法については上記 A) での筆者の解説が参考になると思われるので、以下では、組み合わせだけを紹介することにとどめたい。

- 1) 「年齢」と「所得目的の移民」
- 2) 「自己の専門性が活かした会社の数」と「大学中退かそれ以下の学歴」
- 3) 「自己の専門性が活かした会社の数」と「私は博士号を所持している」
- 4) 「労働賃銀条件が同じ条件の求人が母国からきても帰国しない」と「私は修士号か博士号を所持している」
- 5) 「母国の家族が私の移民について少し不安に思っている」と「母国の家族は私の移民に非常に満足している」
- 6) 「外国に親戚を持っている」と「母国の家族は移民に非常に不満だったが、あなたの移民に同意した」
- 7) 「当該国での勤務企業数」と「年齢」
- 8) 「当該国での勤務企業数」と「移民後 1 週間以内に安定的職場を見つけた」
- 9) 「移民前に賃銀水準について知っていた」と「定住住宅探しを経営者が援助してくれた」
- 10) 「恋人・愛人が定住アパート探しを援助してくれた」と「高収入が移民目的である」
- 11) 「移民前に賃銀水準について知っていた」と「移民前に就職先企業名を知っていた」
- 12) 「移民前には勤務先企業について何も知らなかった」と「1 週間以内に安定的職場を得た」
- 13) 「公共機関や PR を通じて安定的住居を見つけた」と「2 週間以上 1 カ月以内に安定的職場を得た」
- 14) 「移民前に勤務先企業について若干の知識を持っていた」と「私はこの国に親戚を持っている」

- 15) 「最初の職場探しに第三者が援助してくれた」と「男女の愛が移民目的であった」
- 16) 「2 週間以上 1 カ月以内に安定的職場を得た」と「私は PR やインターネットで定住アパートを探した」
- 17) 「最初の 1 カ月、友人が助けてくれた」と「移民前に賃銀水準について知っていた」
- 18) 「最初の 1 カ月、恋人・愛人が私を助けてくれた」と「男女の愛が移民目的である」

このように、家族愛と恋人・愛人関係は強力な社会的ネットワークである。筆者にとって驚くべきことは、学歴や言語能力が社会関係に強い影響力を持っていないことであった。

7. 移民者同士の関係

既に述べたように、筆者は 106 のプラスの 1% 有意水準相関関係を発見し、94 のマイナスの 1% 有意水準相関関係を発見した。そのなかでも移民者同士の関係について、以下にいくつかを紹介するが、「家庭」はほとんどの場合、重要な役割を果たしている。

- a) 既に当該国に移民している家族は、新来の移民家族や親戚の最初の晩の寝場所の提供、次の安定的住居探しを援助している。その相関係数は 1% 有意水準で推認できる。
- b) 既に当該国に移民している家族は、新来の移民家族や親戚の職探しを援助している。その相関係数は 1% 有意水準で推認できる。
- c) 既に当該国に居住している恋人・愛人は、移民してきた恋人・愛人の最初の晩の寝場所、最初の職場と安定的な職場探しを援助している。その相関係数は 1% 有意水準で推認できる。
- d) 既に当該国に移民している家族は、6 日以内に職場を見つけてことができた新来の移民家族に職探しの援助を行なわない。その相関係数は 1% 有意水準で推認できる。

e)「移民目的が収入」である者においては「労働賃銀条件が同じ条件の求人が母国からくれば帰国する」という回答との相関はポーランド人ではプラス相関で、リトアニア人はマイナス相関で1%有意水準で推認できる。

移民者同士ではないが、会社経営者や友人は定住的アパート探しで、同様の援助関係を結んでいる。

8. 合法移民と違法移民

すでに、EUの大部分の国では労働者の自由異動が認められている。しかしそれ以前でも、この問題は移民者にとってさほど重要な障害ではなかった。筆者はドイツ・ラインラント（エッセン市が含まれる）で、既に移民している息子と頻繁に会うため、非合法で移民した母親と面会した。母親は勤務先と住居を1年半ごとぐらいに変えていたが、警察による逮捕は一度もなかった。しかしロマ人や犯罪者集団に対する取り締まりは厳しかった。

9. 職探しの概観的分析

筆者は、移民者を35歳以上と34歳以下の二つのグループに分けた。この二つの集団は、相互にかなり異なった移民動機を持っていた。高年齢層では、職があれば何でも従事するという姿勢であった。若年層にあっては、大学に代表される高等教育機関での学習と、自分に合った職種への就業（アルバイトも含む）をめざしていた。大学授業料は無料か、非常な少額であることが多かった。筆者がソルボンヌをはじめ各都市の学生とは面会できたが、ケンブリッジとオックスフォードの学生には面会できなかった。留学生のほとんどは週に3回程度のアルバイトをしており、親元から仕送りを受けている学生は一人もいなかった。留学生のアルバイト先に関しては、高年齢層と同様に、自分の時間

に合えば職種を問わないという傾向にあった。留学目的の移民数については統計データはないが、インタビューの結果からは急増しているといえる。

10. 結論の概略

ポーランドとリトアニアからEU内部の国への移民動機については、家族間の愛が基幹的要因であった。第二の移民動機は、若者の夢と野心であった。「夢と野心」を「将来の確実性はないが、高収入の予想」と解釈すれば、「所得動機」に分類されようが、学生の就学先の学部をみる限り文学部が圧倒的に多く、この第二の移民動機は所得動機とは異なるものと考えられる。第三の移民動機は所得であって、しかも移民後すぐの所得を求めていた。床掃除やがれきの手押し車での運搬など、つらい仕事を、日雇いから初めて、定職につこうとしていた。これらの人々が高度の技術を伴う高収入職場に移る可能性はほとんどないといってよい。高度のITエンジニアをポーランドから引き抜くという事例には出会わなかった。ただし、予備調査の段階で、ドイツの設計事務所から設計概略をインターネットで受け取り、ポーランドの自宅で設計図を書き、インターネットで設計図をドイツの会社に送り返すという事例がひとつあった。

学生への質問で「将来もこの国ではたらかないか」ということを自由会話の時間に行なったが、ほとんどの学生が「将来、EUのどの国で働くかは分らない」と答えていた。EUにおいて関税の撤廃や、農業を除く産業の生産量の規制が撤廃されたことは良く知られているが、労働市場も「ひとつのEU市場」と呼べるようなものになるのではないかという印象をいだいた。

付記1

本研究には、日本学術振興会より「ポーランド・リトアニアから英・独・仏への出稼ぎの動

機・吸引要因の大量観察研究」に対する科学研究費補助金・基盤研究(B)として、平成19年度、平成20年度、平成21年度、平成22年度の各年に補助金が支給された。

付記2

本稿は、第5回 Eurasia Business and Economics Society の2012年度世界大会で報告されたものを基本にしている。